

伝統に生きる

—あらかわの工芸技術—



桐たんす

かわ また ぜん しち
川 俣 善 七
(号 善修)

(平成元年度作品)

16mm映画・ビデオ
カラー・16分

プロフィール

住所 荒川区東日暮里 6-13-15

明治40年(1907)栃木県生まれ。

昭和63年度荒川区指定無形文化財保持者に認定。

大正11年に上京。浅草の今戸で「桐たんす」をこしらえていた日里秀吉氏に師事。

昭和10年に独立。東日暮里に住居を構えた。

終戦前後、約7年間は栃木県に疎開していたが、再び上京。

戦後は、東京都箆笥組合の組合長をのべ10年間もつとめた。「桐材は、耐火性にすぐれ火事の時など、たんすの中の着物を守ってくれる。また、耐湿性にも富み、通気性もよく、木目の美しさも抜群」と桐材のもつすばらしい特長を最高に引き出そうと努力している業界の長老である。

川俣さんには良き後継者、息子の頼三さん(たの三)がいる。

企画 東京都荒川区教育委員会・製作 毎日映画社

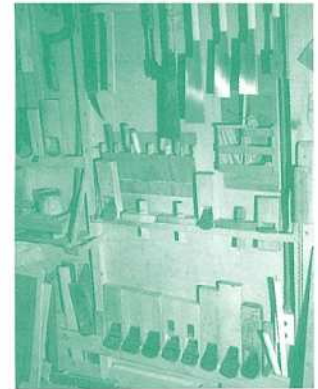
用具・工具

電動丸鋸、ハナギリ、ハタガネ、当て台、鋸、カンナ、ケビキ、ドリル、木釘（ウツギの木で手づくり）

工程

—— 会津桐のたんすの場合 ——

- (1) 桐材を電動の丸鋸やハナギリで、出来上りの寸法より5～10センチ程大きめに切り、寄せ合せる（木取り）
- (2) 板の狂いや反り等を焼いて直す「板焼き」をする。
- (3) 接着剤をぬって、ハタガネで桐板をしっかり固定する。
- (4) 桐板をハナギリで出来上りの寸法に切る。
- (5) 手カンナでたんすの下台を削る。
- (6) ケビキで筋を入れ、叩き落して柄を抜く。
- (7) 脇板（ホダテ）、上板（テンバン）を組み合わせる。
- (8) 底の部分（地板）に足をつける。
- (9) ドリルで穴をあけ、木釘を打ちこむ。
（たんす1棹に800本の木釘を使う。）
- (10) 底の組立て。
- (11) 棚板を入れる。
- (12) 抽出しづくり。
- (13) 扉づくり。
- (14) トノコやヤシャブシ等を使い着色。
- (15) 最後に金具を取付けて仕上げる。



（用具、工具）



（抽出しの組立て）



（完成した桐たんす）

利用される方は…………… ☎ **891-4349**

この記録〈16ミリ映画〉、〈ビデオテープ〉は、荒川区立荒川図書館で貸し出しています。

貸し出し期間は、1回5日間です。お気軽にご利用ください。

※16ミリ映画は、団登録と16ミリ映写機講習修了者が操作することが必要です。